1. 調査テーマ

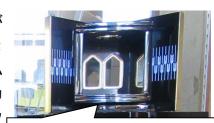
地域教材としての「飯山仏壇」

2. 調査テーマ設定の理由

日本各地には、現在も伝統産業として様々な工芸品の製造技術が受け継がれており、飯山市の飯山仏壇もその一つに該当する。これらの伝統的工芸品は今、全国的にも職人の高齢化や後継者不足、時代の変化に伴う消費者ニーズの変化など様々な課題を抱えているという。それらの点を踏まえ、今年度も昨年度に引き続き、社会調査委員として飯山仏壇の特色を調査すると共に、飯山仏壇の制作に携わる伝統工芸士さんの話を直接聞きながら現在の課題や未来への展望をまとめてみたいと考える。なお、今年度は特に中学校における「総合的な学習」の中でどのような教材化が図れるのか追究してみたいと考え本調査テーマを設定した。

3. 昨年の調査で明らかになったこと

日本各地にある伝統的工芸品が今抱える課題の一つに後継者不足がある。飯山仏壇もまた、伝統工芸士の資格を持つ職人さんの数が昔と比べ減ってきているという。そのような中でも、現在近隣の高校で仏壇づくりの体験を実施するなど、次世代へ技術を継承するための努力も積極的に行っている。また、伝統技術はそのままに、現在のライフスタイルに合わせた仏壇づくりを提案するなど時代のニーズに合あせた変化にも取り組んでいる。



現在の生活様式を意識した飯 山仏壇。中央に位牌を置けるよ うになっており、従来の物より コンパクトになっている。

4. 今年度の調査報告

昨年度の調査の中で、「飯山仏壇」でも各工程を担当する伝統工芸士の資格を持つ職人さんが減ってきていることを知った。そこで今年度の調査では、伝統工芸士の方に直接お話を伺い、課題や今後の展望、「総合的な学習」での教材化の可能性について整理してみたいと思う。以下は、昨年11月7日(日)に味蔵月あかりで開かれた仏壇イベントの際に3名の伝統工芸士の方からお話を伺った内容をまとめたものである。

① 「彫刻部門」森徳壽さんのお話より





◎ 彫刻の技術を知ってもらうために

スマホスタンドなど現在のライフスタイルに合わせたものを作成する事で、飯山仏壇で取り入れられている 影刻の技術を多くの人に知ってもらおうと努めている。

◎ 後継者育成について

飯山高校に出向いたり小学生の体験活動等を通したりして裾野を広げようと取り組んでいる。全国的に見ると女性の職人さんが少しずつ増えていることに明るい兆しがあると感じている。

② 「彫金部門」三ツ井照雄さんのお話より





◎ 彫金の技術を知ってもらうために

あえて仏壇から離れたものを造る事で、「こういうものから仏壇が造られるんだ」ということを知ってもらいたいと考えている。「機械では作り出せない一点もの」であるからこそ手作りにこだわりたいという思いがある。「こういうものはできますか?」といったお客さんの話を聞いて新しいものが生まれることもあるため、そういったお客さんとの交流が楽しいと感じる。特に若い人たちは、自分たちにはない発想をもっており、彼らとの交流の中で制作されたものもある。その例として「表札」や「指輪置き」などがある。

③ 「蒔絵部門」藤沢一雄さんのお話より





※写真は絵付け体験で一般の方が制作したもの

◎ 伝統技術を守りつつ新しいものを生み出すために

時代に合ったものを造る事が大切だと考えている。自分の技術レベルを知るためには、外へ出て外部の人に評価してもらうことが大切であると考えている。実際に外部の評価を得ることで、自分の技術やデザインを磨くことの必要性を感じ、さらなるスキルアップに繋がったと感じている。そうした中で、海外の企業から万年筆に絵を描く仕事の依頼も入ってきており、自分の蒔絵の技術が海外からも高い評価を頂いていると感じる。また、飯山仏壇の特色の1つでもある、修理が可能で再利用ができるという点について、SDGsの観点からも昨今注目を集めていると感じる。

5. 総合的な学習における教材化について

本校の総合的な学習では、今年度より年間を通して全学年で「飯山市の未来を考える」をテーマにふるさと発見学習を進めている。各学年のテーマや柱となる学習は以下の通りである。1学年:「飯山の自然・歴史・文化を知る」をテーマに地域探訪や飯山検定を通して地域の特性を知る。、2学年:「飯山で暮らす人々から学ぶ」をテーマに職場体験学習などを通して地域の方から働く意義を学ぶ。3学年:「飯山に生きる自分自身について見つめる」をテーマに飯山市の街づくりについて考えることを通して、飯山市のより良い未来のために自分にできることを考える。

今回の調査活動を通して、本校の総合的な学習では、1学年では飯山仏壇の歴史と伝統を知り、2学年では、職場体験や講話等で伝統工芸士さんの技術を学び、3学年では、飯山仏壇の PR 法などを提言するといった活動が可能ではないかと考える。今後教材化を進める際のヒントとしていきたい。